

## 戦前のアメリカ伝道と日系移民社会 ⑤

おやさと研究所研究員  
 尾上 貴行 Takayuki Onoue

### 1933年の2代真柱北米巡回

中山正善2代真柱は1933年(昭和8年)の6月から9月にかけて、ハワイ、カナダ、アメリカ本土を巡回している。生涯で19回の海外巡教を行い、アメリカにも6回訪問しているが、最初の渡米となったこの1933年の巡回はアメリカの伝道促進の上に多大な影響を与え、また当時の日系移民社会においても意義のあるものになったと考えられる。訪米のきっかけは、1933年8月から9月にかけてシカゴで開催された世界宗教大会へ招待されたことであつた。

この巡回については2代真柱の著書『アメリカ百日記』に詳しいが、その目的は大きく分けて三つあったと考えられる。一つ目はアメリカ、ハワイ、カナダに諸系統によって設立されていた教会や布教拠点の巡教すること。二つ目は日系移民社会や各地の公館、教会、大学など機関、団体、施設などを訪問、視察をすること。そして三つ目は訪米の発端となったシカゴでの世界宗教大会への出席である。

2代真柱は6月15日に横浜港を出発した後、6月22日から29日までハワイ、7月4日から7日までカナダのバンクーバーに滞在し、7日に陸路でアメリカ本土へ移動。以降7月末までの間に、シアトル、ポートランド、サクラメント、サンフランシスコ、ソルトレーク、ロサンゼルスなどの西部の各都市を歴訪、各地の教会へ巡教し、在住する教信者に大変な感激をもって迎えられた。

同時に、各地の日本領事館、日本人会、邦字新聞社なども訪問し、日系移民社会における要人も多数面談している。この様子は現地の邦字新聞でも大きく取り上げられており、日本から来訪した「若き宗教家」(当時真柱は満28歳)への関心の高さがうかがわれる。例えば、『新世界』(6月26日)はサンフランシスコ到着の2週間程前に「四百万の信徒から仰がれる天理教の中山管長 秩父丸で先づホノルルへ 北米各地の教線巡視」と報じ、『日米新聞』(7月10日)ではサンフランシスコ到着前日に「天理教中山管長一行明日着桑 講演会は12日の晩 滞在プログラム決定」との見出しで、本文には天理教の教会参拝の他、「総領事館訪問」、「住友支店主催午餐会」などの予定も掲載されている。

また『加州毎日』(7月14日)では「米土に活躍する同胞に望む 天理教管長中山正善」との見出しで、2代真柱の挨拶文を掲載している。その中で、2代真柱は天理教を簡単に紹介した後、「今後本教の理想たる甘露台生活、即ち世界平和、実現のためには常に本教の立場に理解ある各位のご声援に待たねばならないと考へるのでありまして此の機会に際し御地の本教運動に関し各位の有力なる御庇護をお願いしたいのであります。」との言葉を寄せている。

西海岸での各教会への巡教を終えると列車で各地に立寄りながらアメリカを横断し、8月には東部の主要都市であるボストン、ワシントンに約1週間ずつ、ニューヨークには約2週間滞在している。この間、各地の日本公館訪問はもとより、現地の大学、キリスト教会、新聞社、福祉施設など様々な場所を訪問、視察している。ニュース雑誌『Time』の記者の取材も受け、同誌1933年8月28日号には2代真柱についての記事が顔写真入りで掲載されている。その中で天理教は、神道の一派で信者500万人、教師6万人、教会1万余、北アメリカに設立され

た30カ所の教会の半数はカリフォルニアにあり、布教活動が活発で学校、出版社、布教部、孤児院などを有するが、500万の信者が神と仰ぐこの人物の来訪を東部のほとんどの人々は知らないなどと紹介されている。

シカゴでの世界宗教大会は、世界各地から宗教家、宗教学者など様々な人々が参集し、8月27日から約3週間にわたって行われた。期間中合計260余名の弁士が講演を行い、2代真柱は30日に「天理教の教祖及教理」との演題で講演した。その他の日本人参加者では、28日に仏教代表の増山顕珠氏(演題「日本仏教の伝統の力」)、29日に金光教の福田善亮氏(演題「太平洋問題と現代日本の世界的地位」)、そして31日には東京大学の姉崎正治教授(演題「近代文明と信仰」)がそれぞれ登壇している。また2代真柱は27日の開会式で神道を代表して祝辞を述べている。

こうしてアメリカ滞在中に、西海岸の天理教教会や布教拠点を巡教し、各地で数々の団体や施設を訪問して見聞を広め、そして世界宗教大会で講演を行ったことは、天理教のアメリカ伝道のみならず日系移民社会、またアメリカ社会一般においても意義深いものであつたと言える。まず教内的には現地に在住する教信者にとって大きな勇みの種になり、邦字新聞などを通して広く日系移民社会に天理教の宣布を行ったことは、布教活動促進の上に大きく貢献したと言える。また各教会へ巡教し多くの教信者と言葉を交わしたり、各地での多様な人々と面談したことは、本部としての現地の状況把握やその後の伝道体制整備に少なくない影響を及ぼしたであろう。

また真柱の来訪は、日本とアメリカ両社会から孤立しがちであつたアメリカ在住の日本人を勇気づけるものとなつた。吉田進3代アメリカ伝道庁長は後に、当時の状況について、

当時真柱の歓迎ぶりは単に天理教徒のみならず、総ての日系人が拳つてのものようであつた。……この時期、アメリカ新移民法によって半ば孤立化された日本からの移民たちは、日本人への排斥の嵐を総身にうけながら遠い祖国への望郷の念を募らせていた。そうした頃の真柱の渡米は、信者にとってはこの上もない朗報となるばかりか、信者でない天理教には縁のない者にも懐かしの日本からの偉大な訪問者として聊か興奮気味な歓迎となつた。(佐々木、8頁)と述べている。

そしてアメリカ全土を巡回したことは、アメリカ社会の人々に天理教を紹介するまたとない機会になつた。各地での施設訪問と要人との面談、世界宗教大会での講演、また『Time』誌などの現地メディアでの記事掲載は、アメリカ社会全般においても広い意味でのにおいがけになつたと言えるのではないか。1933年は、ドイツでのヒトラー政権の台頭、日本の国際連盟脱退、アメリカのルーズベルト大統領による世界恐慌に対するニューディール政策開始など、世界でも大きな動きがあつた年とされ、アメリカではアジアに進出し始めた日本への関心と警戒心が高まりつつある時期でもあつた。真柱の北米巡回はまさにそのような世界的変動期に行われたのであつた。

[参考文献]

佐々木久育「アメリカ・カナダ伝道の足跡(二十)」『海外布教伝道部報』第329号(天理教海外布教伝道部、1992年7月)。  
 中山正善『アメリカ百日記』(天理教道友社、1935年)。